

北安曇の野生の桜について

草 間 勉

T. Kusama: Wild Japanese Cherries in Kita-azumi

◆はじめに 昭和43年ごろから観察を始め、取り組んでいます。南安曇郡奈川村で奥原弘人先生に大山桜なるものを教えられ、この後に、山崎林治先生の支援をいただいて進めて来れました。この間、京都文教短期大学渡辺光太郎先生と東京大学日光植物園元主任久保田秀夫先生の調査に同行して続けて来ました。こゝに心からお礼を申し上げます。

◇研究の経過と要項

1. 「大山桜は大町市が分布の南限であり、植物学的にも貴重である。樹令も長く、染井吉野の欠点をカバーできる。花が美しい。増殖したいが、苗がない。」の新聞記事に接して、それでは苗づくりしようと決心したのが始まりです。(昭和44年)

2. 「発芽の生理学」を著されていた信州大学の中山包先生に教えを受け、種子の貯蔵法と播種育苗方法を確立しました。自生が抑制される要因も調べました。(昭和45～46年)

3. 個体によって花の色、大きさ、花つきが異なるので、種内個体差の比較検討をしました。花のよい樹株の種子をとって増殖しようと考えました。(昭和46年～)

4. 野生の桜の実生が数多く自生して来れない要因の分析追究をしました。(昭和47~50年)

5. 野生の桜は種内変異の幅が大きい。それは花だけでなく、樹型にも著しいものがある。これをタイプわけしました。そして、生長差にも非常にとびぬけた個体が出ることを知りました。(昭和52年～)

6. 北安曇は、野生の桜の種が多種にわたって群落をなし、自生分布わけしている実態にふれ、その要因を分析し、追究しました。(昭和55年～)

7. 調査観察する中で、北安曇における多種にわたる野生の桜の自生分布間で種間交雑が行われ、その結果生じた中間種の事例をいくつも見出しました。
(昭和56年～)

8. 数多くの自生個体を育てる中で、個体特性の変化した例を見出しました。興味ある樹株を選んで定植して育てました。着花樹令も早いものと遅いものでは、1:3位も異りました。(昭和60年~)

9. 野生の桜の形態分類がむづかしい要因は、種間で雑種をつくりやすく、それぞれが雑種性を持って、変化をつづけている種であるためだと考えました。

(昭和50~62年)

10. 種別の枝耐重力量の差は、樹型差や種別に自生分布わけ形成をする要因になっていると考えます。

(昭和62年～)

11. 更に、自生地の標高差、地形、積雪量のちがい、降水量のちがい、温度、日照、土質のちがいなどが、自生分布わけを形成する要因になっています。

(昭和62年～)

12. 信仰の対象とされた場所に生えたものと、花が特別に美しいからという理由から残されたものが古木として残されている。が、ほとんど倒されている。
(昭和62年～)

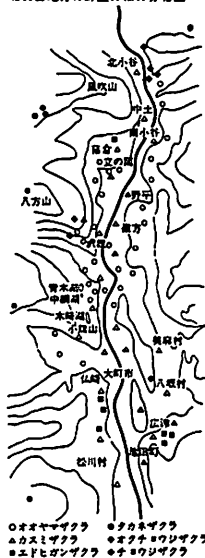
13 野生の桜の

切り倒されて、失われている。早急に、野生の桜の特性を正しく知り、その保護と、その利用をすすめてはならないと考えます。(昭和62年～)

4 野生の桜の

がまだなくて悩んでいます。(昭和63年～)

北宮彙地方の野生の樺の分布図



◆最後に

兎に角、今日は万物を格一化してしまう時代です。日本列島の桜が、染井吉野一色で塗りつぶされているのは間違っています。日本の自然が産み出して育ててくれている日本の野生の桜の多様な姿の価値を見出して、この素嗜らしさを保護し、利用する道をつけたいのです。どうか理解とご協力をお願いします。